本特集は要約版です。詳しくはWeb版をご覧ください。
川崎重工「2009年版 環境・社会報告書」
http://www.khi.co.jp/earth/report.html

特集 1

ステークホルダーミーティング「環境・社会報告書を読む会」

2008年版を読んで
2009年6月4日開催

川崎重工グループのCSR活動について広く意見をお聞きするために

川崎重工グループは1999年に初めて「環境報告書」を発行し、2008年版がちょうど10年目になります。これを一つの節目と捉え、2009年度から、新しい視点での取り組みを展開していきたいと考え、神戸大学の先生方と学生の方をお招きし、「環境・社会報告書を読む会」を開催しました。神戸大学と川崎重工グループの関わりは深く、神戸を地元としともに100年以上の歴史を歩んでいます。そのような身近なステークホルダーの皆様からの率直な意見や疑問をお聞きし、報告書の改善はもちろん、CSR活動のさらなる推進に結びつけていきたいと考えています。

テーマ1 環境・社会報告書全般について

神戸大学の方からのご意見 1

学生の方から“報告書に使用されている用語について、「ミッションステートメント」「コンプライアンス」「コーポレートガバナンス」など、一般の読者には良く分からない言葉が多いのではないか。友人にも聞いたが、横文字よりも「法令遵守」「企業統治」または「内部統制」などの日本語のほうが分かりやすいとの意見をもらった。”先生からは“大学生においても、専攻にもよるが、「コンプライアンス」や「コーポレートガバナンス」のような概念を学ぶ機会はあまりない。卒業しても企業活動と関わらない生活を送る人も少なくない。そういう人のことも考えて、どのように情報を発信するか検討が必要ではないか。”

また、学生の方から“最初のページに「会社概要・事業概要」があり、売上高や経常利益が出てくる。投資家向けの冊子のようで違和感を持った。”先生からは“環境報告とのつながりが分かりにくいからでは。”などの意見をいただきました。

ご意見を受けて

用語の使い方は、読者として対象とするステークホルダーをどう考えるかによって変わると思います。当社の業態においては、どうしても対象は社会人の方が中心になります。すべての人に分かってもらうようにするのはかなり難しいが、大学生以上の方には分かってもらいたいと思って作っています。

また、「会社概要・事業概要」は、報告書の重要な要素です。企業が、どのような事業内容・事業規模でどれくらいの環境負荷を出しているかは、企業を評価する指標にもなります。

テーマ2 経営姿勢について

神戸大学の方からのご意見 2

学生の方から“「ミッションステートメント」で川崎重工のスタンスを明確に示していることは良いと思うが、体系図における「物質的豊かさ」「精神的豊かさ」と「地球」との関わりが大変理解しづらい。”先生からは“「精神的豊かさ」「新たな価値の創造」といった言葉があるが、今の社会にどう貢献していくことを意味しているのか。”

また、学生の方から“中期経営計画の中に「収益力の高いグローバル企業へ飛躍」という表現があり、経営計画の数量目標が記載されているが、この報告書の目的とは異なるのでは。”先生からは“大学生は、企業経営や経済的価値について学んでいる過程であり、等身大の意見だと思う。企業から距離のある生活をしている人も同じような印象を持つ可能性がある。”などの意見をいただきました。

ご意見を受けて

「ミッションステートメント」の基本は「世界の人々の豊かな生活と地球環境の未来に貢献する“Global Kawasaki”」という考えです。豊かな生活には、当然、「物質的豊かさ」とともに「精神的豊かさ」を含みます。従業員全員が、常にこの考えで行動していくことで、製品や事業運営が「ミッションステートメント」の目指す方向に変わっていく。これが社会への貢献につながるのではないかと思います。

中期経営計画の話ですが、企業は経済的にも持続可能であって、初めて環境・社会への貢献が可能です。経済活動自体も、社会に必要な製品を生み出す、雇用機会を創出するなど、非常に大事なことと考えています。

ご参加いただいた神戸大学の皆様

発達科学部 准教授
橋本 直人 様

発達科学部 教授
伊藤 真之 様

発達科学部 准教授
岩佐 卓也 様

人文学研究科 博士3年
藤木　篤 様

人間発達環境学研究科 博士1年
近藤 洋隆 様

人間発達環境学研究科 修士1年
松岡　毅 様

人間発達環境学研究科 修士1年
松岡 佑樹 様

発達科学部 人間環境学科 3年
秋山 和俊 様

発達科学部 人間環境学科 2年
吉沼 春香 様

川崎重工からの出席者

CSR推進本部 地球環境部
部長
藤井 貞夫

CSR推進本部 CSR部
CSR企画課 課長
柿原 アツ子

CSR推進本部 地球環境部
上級専門職
鐵　寛治

CSR推進本部 地球環境部
上級専門職
原　剛敏

CSR推進本部 地球環境部
上級専門職
辻　博

テーマ3 CSR活動について

社会性報告に関して

神戸大学の方からのご意見 3

学生の方から“コンプライアンスの実効性の確保という観点から、「コンプライアンス報告・相談制度」に何件の相談が寄せられ、そのうちどれだけ解決できたのかを教えてほしい。”“CSRとは、貧困などの社会問題の解決に向けた社会貢献活動などを含んでいるものと認識している。たとえば「協働の森づくり事業」のような社会貢献活動にもっと踏み込んでほしい。”などの意見をいただきました。

ご意見を受けて

「コンプライアンス報告・相談制度」なども立上げただけでは、なかなか機能しません。中には、自分が相談することで従業員同士の信頼関係が崩れるかもしれないという不安を抱く人がいたかもしれません。制度についてさまざまな形でPRを行うことで、「報告・相談者の氏名は一切秘密にされる」という仕組みが浸透し、相談件数は増えてきました。昨年の相談件数は17件で、いずれも会社にとっても、相談者にとっても望ましい形で解決できました。

また、当社は、国内外の各地に事業拠点があり、それぞれの特性を活かして地域共生活動を行っています。今後、こうした活動の報告にも力を入れていきたいと思います。

環境報告に関して

神戸大学の方からのご意見 4

学生の方から“省エネルギー活動のグラフを見るとあまり成果が出ていない。環境負荷低減活動が進んでいないのか、あるいは、グラフでは読み取れない成果があったのか。”“「行政措置・注意指導が発生した」という箇所が気になった。会社の方針が現場レベルまで浸透していないのではないか。”などの意見をいただきました。

ご意見を受けて

事業規模の拡大の影響で総エネルギー使用量は増加していますが、もう一つの指標である原単位※1は低減しています。CO_2についても、生産現場の目標として分かりやすい原単位を指標として、できる限りの取り組みを行うことで総量の削減を目指すとともに、現在、次のステップである2020年に向けた中長期の活動計画の検討を進めています。

行政措置に関しては、今年の2月に自家発電設備において、排ガス中の窒素酸化物（NOx）の濃度が、国の定める基準値を超え行政からのお叱りを受けました。各工場にはチェック・管理体制はありますが、慣れなどによるヒューマンエラーの防止が十分にできていませんでした。現在、第三者的な視点から遵法の状況などをチェックする「環境調査隊」を立上げ、再発防止策の徹底に取り組んでいます。

※1 売上高当りのエネルギー使用量

社内ステークホルダーミーティング［2009年2月10日開催］「環境・社会報告書2008に関する意見交換会」を実施

地球環境部とCSR部が主催し、環境部門を始め、技術部門、事務部門などから12人に参加いただき、従業員として読者の立場で、川崎重工のメンバーとして情報の発信者の立場で、報告書の記載内容、環境・CSR活動の内容について意見交換を行いました。この内容は、全従業員に報告書を身近に感じてもらうように社内イントラネットに掲載しています。

特集 2

国内外の事業拠点で独自の社会貢献活動を展開

人・社会・環境が共生する、より豊かな未来を形成するために

川崎重工グループの国内外の事業拠点は、それぞれが独自の社会貢献活動、社会との共生活動を実施しており、ミッションステートメントにある「事業展開のすべての局面において企業の社会的責任を認識し、地球・社会・地域・人々と共生する（グループ経営原則）」を多様なかたちで体現しています。（20ページ「社会との関わり」も合わせてご覧ください。）
川崎重工グループの事業は、輸送機器、環境・エネルギーなどの社会インフラ整備に関わる領域にあり、事業そのものが社会貢献でもあります。これに加え、国内外の事業所および生産拠点がそれぞれの事業活動を行う中で、各自の資源や環境に沿った地域貢献活動も実施し、「豊かさ」の実現に寄与しています。
社会貢献活動の推進を通じて従業員の会社に対する誇りや士気が高まるとともに企業市民としての意識が向上することにより、事業に関わるすべてのステージにおいて「社会的責任」を自覚した行動がなされ、企業品質がより向上していくサイクルが生まれることを期待しています。

in U.S.A.

Kawasaki Good Times Foundation
アメリカでの社会貢献基金の設置

川崎重工グループは、二輪車・鉄道車両・ロボット・建設機械などの事業拠点をアメリカに設置しています。これらの拠点は、それぞれ単独に、また相互に連携して、アメリカ社会に根付いた活動を行っています。

その中のひとつが1993年に設置された「Kawasaki Good Times Foundation（KGTF）」。

いくつかの拠点が資金を拠出して基金を設置し、さらに毎年の利益の一部をこの基金に積み立てています。この基金は、川崎重工の本社組織であるKHI（USA）が管理・運営し、運営金は、メトロポリタンミュージアムなどの芸術・文化施設や、各種慈善事業、ならびに教育・医療・科学の振興活動などに寄付されています。

アメリカには社会貢献文化が根付いており、ボランティア、金銭での寄付、物品ギフトなど、さまざまな手法での取り組みが自然にかつ広範囲に行われていますが、当社もこの文化を尊重し、共生の精神を学んでいます。

in Japan

カワサキプレシジョンマシナリの緑肥稲作の取り組み

ものづくりの原点・根本は農業にあり

株式会社カワサキプレシジョンマシナリ（神戸市西区）は、業界随一の規模と生産設備を誇り、あらゆる機械・プラント向けの油圧機器を生産する企業です。同社では、「ものづくりの原点は農業にあり」との視点で、オートメーション化された生産プロセスだけがものづくりのすべてではないことを新入社員に教育するため、地元農家グループの協力のもと、兵庫県立大学と協働にて工場隣接の水田を借り、米づくりに取り組んでいます。

この米づくりには、まず田に花を植え、これを田の土にすきこんで肥料とする「緑肥稲作」が導入されており、促成の化学肥料農法とは違いさまざまなプロセスを経て稲が育つということを体感できるようになっています。さらに、近隣の農家や、農業を兼業している従業員の指導も受けながら取り組むことで、地域社会と一緒に汗を流す機会ともなり、また花摘みには家族も参加できるという楽しみもあります。

収穫した米は、参加者に分配されるほか、工場の食堂にも提供され、全従業員にふるまわれる予定です。

緑肥となる花の生育

新入社員も参加した田植え

2009年度 新入社員 農業体験スケジュール（上期）

5月	草刈り・すき込み	7月	雑草抜き・生育調査・草刈り	9月	生育調査・草刈り・稲刈り
6月	代かき・田植え・生き物調査・草刈り	8月	出穂状況・病害調査・雑草抜き		

KCMの溜め池浄化の取り組み

企業にとって善いものを地域社会にも拡大

兵庫県の播州平野は、国内有数の溜め池の多い地域です。この播州平野に所在するホイールローダーなどの建設機械を製造している株式会社KCMでは、「EM菌」という菌を培養して自社内にある池の浄化を行っています。

工場の所在する地域には、毎年正月にKCMの関係者も安全祈願に参拝している神社がありますが、この神社の祭礼で氏子がみそぎのために飛び込む池がヘドロ臭を発するようになったことから、KCMでは地元の要請に基づいてこの「EM菌」の提供を行いました。

祭礼風景

感謝状

KCMが寄付したEM培養液と池の泥と混ぜ合わせて、近くの小学生や自治会が「EM団子」をつくり、池の周辺にばら撒いたところ、池に飛び込んだ氏子達からは、「今年は全然ヘドロ臭くなかった」と、その効果を感謝されました。

EM菌：（Wikipediaより）1982年に琉球大学農学部教授比嘉照夫が、農業分野での土壌改良用として開発した微生物資材の名称。乳酸菌、酵母、光合成細菌を主体とする有用な微生物の共生体で、農業、畜産、水産、環境浄化、土木建築などさまざまな分野に利用されている。